

日本ウマ科学会  
会長

菅野 茂



## 「ウマ科学の発展と 優秀な人材養成への期待」

「新年おめでとうございます。今年こそは景気が回復して、競馬ファンの懐が潤い、競馬の売上げが下げ止まりとなりますよう、心から祈念いたすところです。」実はこの文章は、3年前のBTCニュース78号(新年号)に、当時、JRA 総研所長で、現在はこのBTCニュースの編集を担当されている藤井良和氏が書かれたものです。

あれから3年経ちましたが、残念ながら、今でもこのご挨拶が通用する社会ならびに競馬界の現況かと思われまます。競馬の売上げが伸びないということは、畜産振興事業への助成が縮小することにも繋がり、3年前(社)畜産技術協会会長に就任した私にとってもまことに頭痛いことであります。まずは、年頭に当り、私からも改めてこのようなお祈りをさせて頂くことにします。

ところで、このたび歴史ある「BTCニュース」の“た・づ・な”欄への執筆を依頼されたのですが、これまでの“た・づ・な”を拝読しますと、そうそうたる競馬界の重鎮が執筆され、貴重な提言をされています。競馬界に籍を置いたことのない私がこの任に相応しいのかじくじたる思いがありますが、表題に関連して、以下に私の現在の思いを述べさせていただきます。

現在の日本中央競馬会(JRA)が創立されたのは、昭和29年、現在の競走馬総合研究所(JRA 総研)の前身である競走馬保健研究所の創立は昭和34年ですから、どちらも既に創立50周年の祝賀を終えております。そして、この両者に深い関係をもつ日本ウマ科学会(平成2年創立)と軽種馬育成調教センター(BTC、平成3年創立)も、3年前からあいついで創立20周年を迎えました。

ここで、わが国の競走馬を支える上記の重要な組織に、私がどのように関わってきたかについてふれます。私は昭和36年に東京大学農学部を卒業し、一時、民間の研究所に勤めたあと、昭和52年に母校の畜産獣医学科(当時)の講座に助教授として赴任し、昭和61年教授に昇任の際、澤崎坦先生の講座を引き継ぐことになりました。その講座は昭和10年に馬学講座として発足した歴史を持つ

講座でしたので、私は現在に至るまでいろいろなかたちで馬に関わる機会に恵まれてきたと言えるでしょう。

東大現役時代には、特にJRA 総研の運動科学研究室の方達との共同研究で、古くは宇都宮育成牧場から始まり、日高育成牧場等で調査ならびに実験研究に携わってきました。その中で、最も印象に残っているのは、あの有名な国内産の5冠馬シンザン号との出会いです。彼は多くのファンに惜しまれながら、平成8年7月13日にわが国最高齢馬(35歳3か月)の記録を樹立して天寿を全うしたのですが、亡くなる2カ月前に私達が24時間心電図を記録し、重篤な心房細動症を患っていたにも関わらず、消化器系が丈夫で長生きしたことを確認したのです。そして、この成績は国内は元より海外の馬関係の学術誌に公表しました。

JRA が創立50周年を迎えた平成16年には、JRA 総研と日本ウマ科学会の共催により公開シンポジウム「競走馬のスポーツ科学—それは競馬に何をもたらしたか—その未来を探る」が開催され、大変な反響を呼びました。このことを、上原伸美元日本ウマ科学会会長は、競走馬の育成・調教にスポーツ科学を取り入れていこうとする気運が高まった現れと評価しておられました。

ジャパン・カップ発足当時、外国産馬に歯が立たなかった内国産馬にとって、「強い馬づくり」の成果が現れつつある昨今、将来とも「経験を裏打ちする科学」(平賀敦氏言)の重要性を、現日本ウマ科学会会長の私も身に染みて感じています。

一方、「世界に通用する強い馬づくり」にもうひとつ欠かせないのは、「育成調教の充実」とそれに関わる「優秀な人づくり」と言われています。ウマ科学の発展と育成調教に関わる人材養成に全面的に貢献する使命を持つ、BTCの責務は重く、平成11年以来、BTC評議員を仰せつかっている私にとっても、他人事ではられないという思いで一杯です。BTCニュースを愛読されている方々共に頑張ろうではありませんか。